

先見経済 SENKEN KEIZAI

Since 1938

9 15

9月15日号

先見TOP interview

企業は〈物語〉を 提供できているか

経営コンサルタント
神田昌典
聞き手・山口哲史

好評連載

井熊均
井徳正吾
今井激
鎌田慧
小松義夫
境野勝悟
高橋徳子
酒崎益夫
横田高武
和田秀

特集

注目の新興市場 中東でチャンスをつかめ

清話会セミナー講演録

武地義治

新税制を経営に活かすために

太田泰義

不況下でも成長を続ける
ブラジルに学ぶ

近藤真史

日本の将来を左右する
民主党代表選



企業は〈物語〉を提供できているか (後編)

「見えている企業」が付加価値の高いビジネスモデルをつくる

聞き手▼山口哲史 株式会社エフプロ・アクティブ代表

今号は前号に引き続き、カリスマ経営コンサルタントとして名をはせる神田昌典氏が登場。歴史の転換期には新しい価値観が生まれる。そこで社員に生きがいを提供し、新しいビジネスモデルを構築できるかが、成功の鍵となる。

**20代、30代が
今やるべきこと**

山口 会社の規模によって、事業の動きの速さに違いは出るのでしょうか。

神田 もちろん社員数が多くなるほど会社の動きは鈍くなるでしょう。ましてや、上場企業は稟議を通すのも難しく時間がかかる。社長が頑固な会社も同じ。そうした会社は、時代の先を行くフットワークの軽い会社の後を追って、残ったパイを奪い合うしかありません。

山口 でも、フットワークの軽い、例えば30代の経営者でも、40代になると慣れてしまいがちですよね。

神田 ビジネスが守りに入るからです。30代のうちは、社員や新規事業を視野に入れたブ

ランディング、また付加価値の高いビジネスをいかに構築するかを考える人が多い。ですが、40代になり、一定の成果を得てしまった途端、そうしたことを忘れてしまうのです。

山口 そうなると、若いうちにいかに自分を確立するかが大切ですね。最近では保守的な20代が増えていると言われますが、

神田 一握りの優秀な人もいますが、ぬるま湯で育つたために自立心よりも依存心が強い傾向にあります。その意味では、社会のお荷物になるので、いい消費者になってくれればいい。

山口 厳しいですね。では、20代に可能性はないと。

神田 いいえ、20代は高いITリテラシーとゲーム感覚を持っています。だから経営者が働く





先見TOP interview

with 株式会社ALMACREATIONS 代表取締役

神田昌典

ホスト

山口哲史 (やまぐちてつし)

1961年兵庫県生まれ、関西学院大学商学卒業後、リクルートなどを経て90年、現(株)アマ・アクティブの前身のファイルド・アクティブを設立、竹100%でできた編集など自然でビューアなエネルギーを活用した「人を自然に輝かせる(ラディアンズ)」力のある健康、美容商品の企画・販売を手掛ける。社内外ともに「ガッツさん」の愛称で親しまれている。

<http://www.proactive.co.jp>

環境を整えることさえできれば、開化する可能性があります。それでも大多数は低賃金で命令されたことをやる、扱いやすい人材に育つという意味ですが。山口 20代をどう活かすかは課題ですね。神田 「大人の良心」で考えていくことです。彼らの分まで稼げる人が面倒を見る。同時に彼らの天分を活かせるような環境を整えていくことが大事。僕らが若いころは随分混雑した仕事をやらされました。その分、一つの発想から始まり、物事が決着するまでの一連のプロセスを経験できた。教え・教えられる自然な人間関係があったのです。山口 今は仕事のプロセスなどは見えづらいですね。神田 この10年間で日本企業が抱えてきた問題の一つです。そ

う考えた場合、20代は大企業で高い賃金をもらうよりも、お金を払ってでも中小企業で仕事をさせてもらうべきです。中小企業では、大企業と違って若くてもチャンスはあるし、自分自身で考え、動かなければならないことが多いですからね。(物語)を提供する 中小企業が生き残る 山口 これからの組織に必要なことは何ですか。神田 どうプロジェクト・チームをつくり、各人のモチベーションや能力を引き出して結果を出すかです。人は仕事を通して、何をしたら叱られる、喜び合えるなどを経験しながら成長します。昔はパワハラもありましたが、一方で飲みニケーションなどの絆もあった。ただし、これは終身雇用制度だからこそ機能するワークスタイルで、今同じことをしても人は育ちません。山口 今はソーシャル・アントレプレナーがそうした発想で結果を出していると聞きます。彼らはNPOやNGOを通して社会に働きかけることも多いですね。ビジネスとの関係はどうな

って行くのでしょうか。

神田 経済自体は、「宗教経済」へと流れていくでしょう。ここでの宗教とは、「新しい価値観を明確に伝えられる」という意味です。歴史の転換期には新しい価値観が生まれます。当然、その過渡期には価値観が混迷する。そんなとき、人々がまず求めるのは精神的な支えです。だから、次の時代を予測し、新しい価値観でビジネスを展開している会社には、自然と人が集まります。そして、そうした人たちは、ボランティアあるいはお金を払ってでもその会社に勤め

たいと考える。

山口 まるで修行ですね。

神田 彼らが豊かさよりも、夢や生きがいを求めている証拠です。これは人生において(物語)を求めているとも言え換えられます。例えば、高度成長期ほどの会社でも、「物を持って豊かになる」「アメリカに追い付け追い越せ」と、社員が目標に向かい、全社一丸となって働いて

いました。こうした(物語)が見えなければ、社員は生きる意味もわからず、台詞のない舞台に立っているのと一緒です。

山口 今(物語)を提供して、新しいビジネスモデルを構築しているところはありませんか。

神田 「オタクキング」こと岡田斗司夫氏が実施した、「1カ月1万円払えば、誰でも社員になれる」という試みはユニークでした。今は会社で社員を叱るとパワハラになりますが、岡田氏は社員を毅然と叱り飛ばします。経営者は社員を叱って育てる義務があるというわけです。

価値観が混迷する時代 人は〈物語〉を求める

同時に、お金を払ってまで社員になつていくのだから、安心して叱れるわけです。一方の社員もそれを望み、そこに(物語)を感じて集まったようです。

世界経済の中心地

アジアで何が出来るか

山口 今後の世界経済を考えたときに、日本の中小企業やビジネスパーソンはどういった視点